



第 176 号

令和元年 8 月 30 日

編集 旭川医科大学
発行 教務部学生支援課

(題字は初代学長 山田守英氏)



「ファーム富田」

(写真撮影：学生支援課)

平成31年度入学生への学長挨拶 ……学長 吉田 晃敏……2	旭川医科大学に入学して ……医学科第2学年 佐藤 有沙……21
第17代図書館長に就任して ……図書館長 大崎 能伸……13	旭川医科大学に入学して ……看護学科第1学年 笹原 温大……22
教授就任のご挨拶 ……教育センター 野津 司……14	旭川医科大学に入学して ……看護学科第1学年 田中 結衣……22
教授就任のご挨拶 ……医育統合センター 牧野 雄一……15	旭川医科大学に入学して ……看護学科第1学年 千葉木乃実……23
教授就任のご挨拶 ……生化学講座(機能分子科学分野) 川辺 淳一……16	旭川医科大学に入学して ……看護学科第1学年 藤澤 怜央……23
旭川医科大学に入学して ……医学科第1学年 五十嵐諒真……18	旭川医科大学に入学して ……看護学科第1学年 古瀬 もも……24
旭川医科大学に入学して ……医学科第1学年 及川 玲菜……18	平成31年度 入学式を挙行了しました……25
旭川医科大学での学び ……医学科第1学年 神山 琢弥……19	平成31年度 医学部医学科・看護学科 新入生合同研修会が実施されました ……26
旭川医科大学に入学して ……医学科第1学年 川田 栞寧……19	健康セミナー 「わたしのみんなのげんき種 in 緑が丘」を開催 ……27
旭川医科大学に入学して ……医学科第1学年 関根 慶佳……20	医大祭2019「医進月歩」を終えて ……医大祭実行委員会委員長 滝沢 元……28
旭川医科大学に入学して ……医学科第1学年 福田 瑞樹……20	地域枠学生とメンター教員との交流会を開催 ……30
旭川医科大学に入学して ……医学科第2学年 稲葉 正昭……21	難病の方々から体験談を聴く ……31
	教員の異動 ……32
	今後のスケジュール ……32
	訃報 ……33



平成31年度 入学生への 学長挨拶

旭川医科大学 学長 吉田 晃 敏

北海道に桜の便りが届くのはまだ先になり
そうですが、旭川にも、遅い春がようやく訪
れようとしています。

これまでの努力が見事に実を結び、こうし
て本学の門をくぐった皆さんにとっては、ま
さに「待ち望んだ春」到来と思います。

入学された医学科第一学年107名の皆さ
ん、医学科第二学年・編入生10名の皆さん、
看護学科第一学年60名の皆さん、ご入学おめ

でとうございます。これからは、ここ旭川医
科大学が皆さんの「夢を実現する舞台」で
す。私達教職員は、皆さんがこの「夢」を実
現できるよう、全力で応援します。

ここで、私から新入生の皆さんに、スライ
ド形式で「学長最初講義」を贈ります。医療
を取り巻く現状や医学を学ぶことの厳しさ等
を、写真やビデオを交えながらお伝えしま
す。



医学科 第1学年 **107名**の皆さん
第2学年・編入生 **10名**の皆さん

看護学科 第1学年 **60名**の皆さん

入学おめでとう

今から46年前、

政府は「**一県一医大構想**」のもと、
16の医学部・医科大学を創りました

本学は、
第1号として**46年前**に誕生

私は、「**大きな希望**」を胸に、
第1期生として、入学

道内では、毎年**300名**以上の**医師**が誕生

しかし、その中の**半数以上**が**道外へ流出**

これが現在の、大問題

看護師不足も深刻

札幌、旭川に集中しているため

旭川医大方式の「医療格差」解消法

「医療格差」の解消法

1. 入試制度 (医学科)

2. 遠隔医療

①北・東、地域枠 (11年前から)

(11年前から)

10名



②全北海道 特別枠 (10年前から)

●北海道内から**40名**(H31年度から37名)

これで、定員の約50%まで「**地域枠**」(全国初)

そして、多くの卒業生を旭川医大に残してきた

地域枠の成果(■ 道内)



道内出身者が**6割**

次の問題は、6年後大学に残るか？



次の問題は、6年後大学に残るか？



「医療格差」の解消法

1. 入試制度 (医学科)

2. 遠隔医療

NHKニュース

1994年(25年前)

「クローズアップ現代」

2004年(15年前)



旭川医大は、
立体(3D)の、ハイビジョン(HD)伝送を
世界で初めて成功

「ワールドビジネスサテライト」

2010年(9年前)



3D-HD製品化

「オトナの社会科見学」

2016年(3年前)

「オトナの社会科見学」

年間5,000件

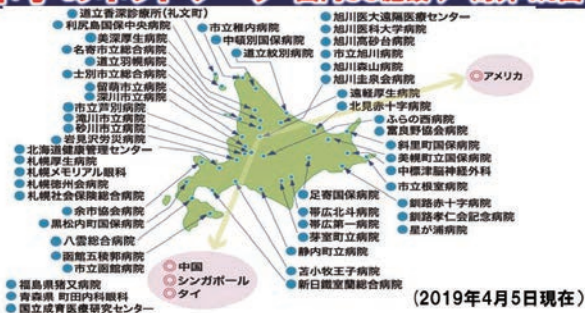


在宅・医療
旭川 ⇄ 網走



放射線の画像伝送

本学のネットワーク 国内50施設 / 海外4カ国



一方、旭川医大は、
大きく、カジを切りました

(ローカル)と(グローバル)
地域医療 世界の医療

- ローカル - 北海道?
- ナショナル - 日本
- リージョナル - アジア
- グローバル - 世界



世界の医療を見て、
北海道の医療を考える

接点

よりグローバルに

よりグローバルに

1. 国際医療人育成枠
2. 遠隔医療の海外展開



国際医療人育成枠

今年 **4**名 入学

- 6年間、外部の英語試験を受験
- 6年間で、1～2ヵ月の海外留学を経験



よりグローバルに

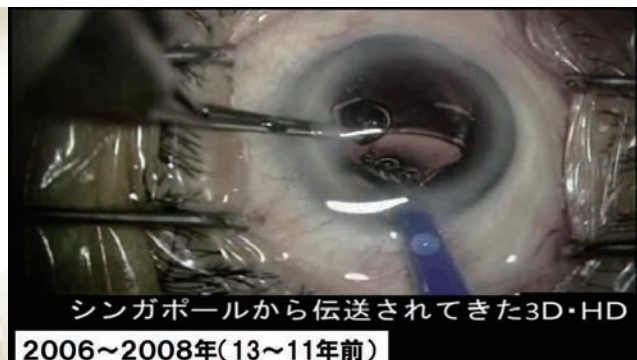
1. 国際医療人育成枠
2. 遠隔医療の海外展開の歴史



2006年

私が「プロジェクト・リーダー」となり

旭川、シンガポール、タイの3地点で、
世界初・立体ハイビジョン映像の伝送



中国への支援





日中
「政府間の交流停止」



中国からの書簡

吉田先生：
.....

中国の“第十二回、五か年計画”に
「吉田式の遠隔医療」を取り入れることを
政府で決めました

.....

中国衛生部



モバイルを用いた医療

13年前を振り返ると、
我々は既に新しいスタートを
切っていた





クラウド医療 (遠隔医療開始24年目のヒラメキ)



クラウド医療 (遠隔医療開始24年目のヒラメキ)

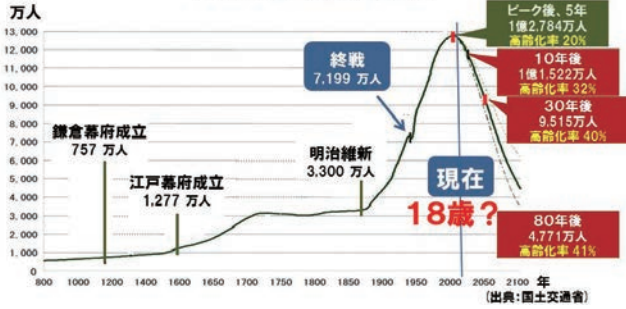


クラウド医療の海外展開

それは
わずか
2年5ヶ月前でした



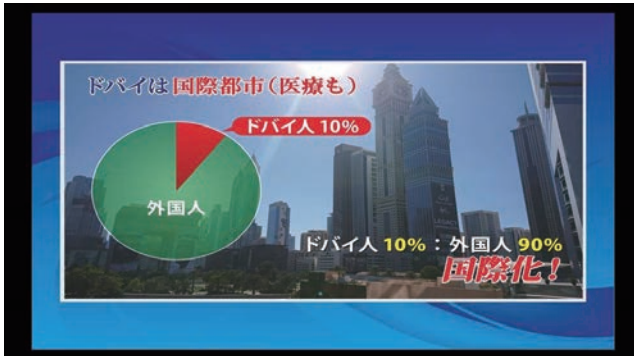
人口と高齢化率



これからの医療は、大きく変化する

では、どう対応するのか

国際的に見てみよう



2018年3月9日~3月15日

UAE Dubai 訪問2回目



ロシアとの交流



現在、他の7分野には、進展がない
(国境問題)

しかし、「医療」には国境が無い



日本側は、次の協力を検討することを提案した。

- 航空機による緊急搬送
- 遠隔医療 (テレメディスン) について相互協力
- 医師、看護師、医療技術者を研修

サハラ側は建設的な協力関係の継続について改めて確認し、提案を検討する姿勢を示した。

双方は、協力可能な項目を相互に検討し、すべての問題について意見交換を継続することに合意した。

サハラ州保健省大臣 A. K. バク 旭川医科大学学長 吉田晃敏 旭川市副市長 表憲章



世界初、
8K医療の開始

医療画質の歴史 (25年)

ISDN × 1回線	(1994年)
ISDN × 3回線	(1995年)
ISDN 光ファイバ	(1995年)
ハイビジョン	(2004年)
立体(3D)ハイビジョン	(2010年)
8K + α	
「見えないものを 8K + α で見て、手術をする」	

8Kとは、壁に新聞紙を貼り、



10メートル離れたところから、
全ての文字が見える解像度



まだまだ「その先」がある



将来は、8K以上に！

一方では、皆さんにとって
厳しい現実もあります

残念ながら、
第1学年、第2学年では、
成績不良で留年する学生が多い

留年者数

医学科	第1学年	第2学年
今年	2名	5名
昨年	19名	7名
看護学科	第1学年	第2学年
今年	3名	
昨年	3名	

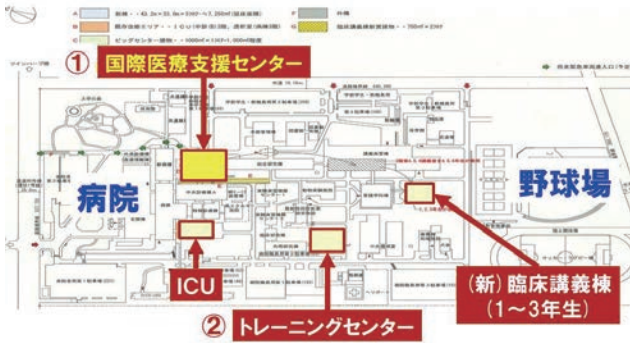
大学は、高校、予備校とは全く違う
皆さん自身が、自ら、学び続ける
それが、「医学部」です

国家試験という、関門もあります
しっかりと勉強し、突破してください

今年の国家試験 合格者 (新卒者)

旭川医学科	115 人 ➔ 40人 (大学病院)
札医大	101 人
北大	98 人
看護学科	63 人 ➔ 29人 (大学病院)

さて、今後の旭川医大を
語らせてください



この「支援センター」で、

- 海外から、医師、看護師、技術者を受け入れ、「高度医療」を教育
- 「日本製の」最先端機器を使い、帰国後も継続
- そのために、「クラウド医療」を海外へ普及



国際トレーニングセンター



国際トレーニングセンター

1. 最先端医療技術の習得

外国人Dr 日本人Dr 学生 企業

2. 新しい医療機器の輸出に貢献

③ 国際クラウド・センター (9,000㎡) (ビッグデータ、AI)



国際クラウド・センター

- 世界のビッグデータを集め、AIでデータ解析
そして、{世界の医療情報のハブ形成}
- 「次々世代」の戦略的医療の展開！！

未来に向けて、旭川医大は、益々

邁進

します

結びに

私が**皆さん**に望むこと

Let's aim high!

No Limits!

日本一ではなく、**世界一**を

皆さんの**活躍の場**は、

「∞」です

一緒に、頑張りましょう



旭川医科大学
Asahikawa Medical University

入学、おめでとう



第17代図書館長に就任して

図書館長

大崎 能伸

2019年4月から旭川医科大学附属図書館長を拝命いたしました。旭川医科大学は1973年9月に設置されました。図書館の事務室は大学の開設と同時に設置され、11月から仮校舎で閲覧業務が開始されています。仮校舎は北海道教育大学旭川校の敷地にありました。一期生は1973年11月に入学しましたが、二期生以降からは4月の入学です。二期生が入学した1974年には、5月に仮校舎から現在の旭川医科大学の敷地に建った初めての大学施設である講義実習棟に移転しました。当時の旭川医科大学の住所は神楽岡で、緑が丘ではありませんでした。このころは学年が上がる毎に大学の施設が増えて、食堂ができた、体育館が建った、研究棟ができた、病院ができたなどと喜んでいたように思います。私は1980年春に二期生として旭川医科大学を卒業しました。

旭川医科大学附属図書館は福利厚生施設の2階に雑誌閲覧室として1974年8月に開設されています。1974年11月1日には、私が入局した内科学第一講座の初代教授の小野寺壮吉先生が初代の図書館長に就任されています。1976年11月1日に医学部附属病院が開院し、附属図書館は1978年（昭和53年）1月に現在の場所に竣工しました。大学医学研究棟が設置されたのは1979年の4月で、一期生が卒業した翌月です。こうして大学の沿革を眺めてみると、雑誌閲覧室の設置を含めると大学の設置と同時に図書館が開設されたこと、早くに図書館が建設されていることがわかります。すなわち、大学の図書館は、研究、教育の中心として、大学の最重要施設としての役割があるのです。

研究のアイデアを考えるときや、担当している症例の病態が理解できないときは、文献検索をして情報を集めて自分の考えを整理します。このときに大切なことは、参考にする論文の質です。大雑把に論文検索をすると、自分が思い込んでいる通りのことが書かれている資料が集まり、間違った結論に誘導されてしまうことがあります。再現できない動物実験について記載された論文もあり、これを参考に研究を組み立てて時間ばかり浪費することもあります。最近、私も実際に経験しました。新規治療法の研究のため、マウスのピロリ菌感染モデルを作ろうと計画しました。出版されたのちに、引用が複数されている論文を参考に実験を進めましたが、マウスの胃は雑菌が多くピロリ菌を感染させてもきれいに分離されてきません。何回か失敗を重ねたのちに引用文献をよくみると、引用している研究を行なった施設が同じ研究グループの施設であることがわかりました。多分、特殊な技術やコツがあって、論文に書いていないために再現ができないものと思われれます。偏りのない、正確な情報は研究の能率と質に直結します。また、過去の資料に当たることも質の良い研究を進める上でとても大切なことがあります。免疫チェックポイント阻害剤による癌の治療は、2018年に本庶佑先生がノーベル賞を受賞して注目を集めています。癌の免疫療法の研究の歴史は1893年のColeyによる細菌感染による腫瘍縮小効果の報告にまで遡ることができます。1890年には世界初のがんワクチンとしてのColey's toxinsが開発され、1953年にこの研究内容が初めて報告されています。このような歴史に触れることにより研究者に良いアイデアが生まれてくるかもしれません。図書館からは、このような重要な情報を発表年代順に並べ、研究内容毎に整理することができる、印刷物として入手することができます。

研究の指標となる重要な情報を提供することが、図書館の最も大切な機能だと思います。そのためには、重要な資料を収集すること、アーカイブした資料を閲覧しやすく整理すること、迅速に研究者の要望に応えることなどが大切で基本的な任務だと思います。小野寺壮吉先生が初代図書館長をお勤めの後、歴代の初代教授を含む諸先生が図書館長にご就任され、第17代目に本学卒業生として初めて私が重責を担うことになりました。歴代の図書館長が、学府の中心機関として大切に守って育ててきた旭川医科大学附属図書館を、その意義と機能をますます充実させて次世代に伝えることが私の使命だと思っています。



教授就任のご挨拶

教育センター

教授 野 津 司

この度教育センター教授、地域医療教育学講座教授（兼任）に就任しましたので、ご挨拶申し上げます。私は北海道の足寄町で生まれ、高校は帯広柏葉に進み10期生として旭川医大へ入学、1988年に卒業しました。その後内科大学院に進み学位を取得後、市立旭川病院、釧路市医師会病院、東大医科学研究所等で勤務しました。消化器内科を専門とし、1996年からカリフォルニア大学ロサンゼルス校消化器病研究センターへ2年間留学し、基礎的研究を行いました。帰国後、北大総合診療部勤務を経て、2002年から斜里町国保病院で長期に地域医療に従事しました。2010年に母校に復帰し、これまでの経験を生かして、大学での地域医療教育の責任者として仕事をして参りました。具体的には、1、2年生に対して行う早期体験実習、6年生で行われる地域医療実習の企画・実施と地域医療学の講義等です。これらの機会を通じて、北海道型の地域医療とはどのようなものか、またそこで力を発揮するためには、いかなる能力を身につけなければならないのかについて、自分の経験と様々な事実を基にして学生に伝えてきました。今後は地域医療教育に限らず、教育全般に携わる立場となります。

お恥ずかしい話ですが、これまでは診療活動と基礎研究を主としてやってまいりましたので、地域医療教育は別にしましても、一般的な医学教育に関する知識が不足しております。諸先輩からいろいろなことを学び、一刻も早く大学に貢献できるよう全身全霊を注ぐ所存でございます。このような私ですが、先に述べたとおり長期に地域医療を実践してきた経験がございます。現在本学で教育に携わっている教官で、私と同じ経験をしてきた者はおらず、この貴重な経験を生かして、教育全般に携わって行ければと考えております。また、現在本学の地域医療教育に御協力を頂いている地域医療担当病院（名寄市立病院や足寄国保病院等）で診療応援をさせて頂いており、これは変化する地域医療を理解する貴重な機会であり、また現役で地域医療活動を続けることが、本学の地域医療教育の充実に直接寄与するものであると考えております。一方学内では、総合診療部や救急部で診療にあたり、その場で学生や研修医教育に直接関与し、また基礎実験・研究も継続しており、大学院生を指導しております。大学教官の仕事には教育、研究、臨床（診療）という3つの柱がありますが、これらのバランスを保ちつつ現役で続けることで、本学に合った医学教育の形というものが見えてくるのではないかと確信しております。最近医学教育は大きく変化しております。我々が学生だった頃は、座学を大講義室で長時間受けるという形が教育の大部分でした。現在ではこの座学という教育が大幅に縮小されてきております。新しい教育手法が複数提案され、本学でもそれらが導入されてきております。これは全国的な趨勢ではありますが、果たしてこれらの方法が本当に本学の学生教育に合っているのか、効率が良いのかという批判がございます。私にはその批判に対する答えは見つかりませんが、確かなことは、座学を主体にして現在の医学教育を行うことは不可能であるということです。なぜなら、知っていなければならない医学知識が膨大となり、講義で全てを網羅することができなくなったからです。

このような状況では、学生が自分の知識の足りない領域に気づき、自らそれを克服するよう学修・努力する姿勢が極めて重要になります。これは、生涯学習することが求められる卒業後の医療者としても必須の姿勢です。能動的に学習する姿勢を身に着けさせることが、医学教育の本質になっているということです。自分はこのことを常に念頭に置いて、本学にふさわしい教育のあり方を考えていこうと思っております。一人でも多く社会に貢献できる医療者・医学研究者を育てるべく全力を尽くす所存でございます。よろしくお願い申し上げます。



教授就任のご挨拶

医育統合センター

教授 牧野 雄一

令和元年5月16日付けで、このたび新設されました旭川医科大学医育統合センター教授を拝命いたしました。

私は、平成4年に本学を卒業後、内科学第二講座（現内科学講座病態代謝内科学分野）に入局し、今日に至るまで膠原病・内分泌疾患を中心とする内科の教育、研究、診療に携わって参りました。内科学の扉を開いてくださった、当時の内科学第二講座教授、牧野勲先生をはじめ、これまでご指導ならびにご厚情を賜りました多くの方々にご場をお借りして心より感謝申し上げます。

さて、本学は「地域医療に根ざした医療・福祉の向上に貢献する医療者、教育・研究・医療活動を通じて国際社会の発展に寄与する医師および看護職者を養成する」ことを教育の理念として掲げ、これまで数多くの卒業生を輩出して参りました。現在、本学ならびに卒業生が担う社会的役割は、①本学が発展的に継続してきた地域医療の整備と充実、②厚労省や北海道ならびに道内各自治体による地域医療振興への貢献、③クラウド医療など遠隔医療の新機軸の創出と実践、④8K画像など新技術医療の開発と実践、⑤専門医と基礎医学研究者の養成、⑥国際的医療人の養成と国際医療支援、など、非常に多岐にわたっています。一方で、我が国、とりわけ北海道で顕著な人口減少と超高齢化の問題、事業や産業の衰退、交通や医療・福祉施設など社会インフラの衰退などにより、医療に関わる地域のニーズは急速に変化しつつあります。本学は、かかる社会の多様な変化に対応して質の高い医療を提供できる人材を養成するため、入学センター、教育センター、卒後臨床研修センター、専門医育成・管理センターの連携を強化し、入学から専門医育成に至る一貫した教育指導体制を一層充実させることを目指して医育統合センターを設立しました。

現在、医学教育はプロセス基盤型教育から学修成果基盤型教育への転換、すなわち「何を教えるか」から「何ができる卒業生を育てるか」へのパラダイムシフトを遂げようとしています。本学におきましても、学修成果基盤型教育の一環として、2015年のカリキュラム改定に合わせて“何ができる卒業生であるべきか”を「卒業時コンピテンシー（≡アウトカム）」として明示しました。当然のことながら、この卒業時コンピテンシーは、卒業生が地域社会、国際社会に質の高い医療を提供する専門医・研究者となるための出発点でもあり、常に社会からの評価と要請を受け変化するべきものであります。一方で、このコンピテンシーは、本学における教育の目標であり目的であることから、本学を志願する未来の医療人やその周囲の方々に理解されやすいものでなくてはなりません。その内容を理解し、納得した人が本学を志願することは、適切な入学者選抜が行われるための重要な条件の一つです。私は、従来の「地域医療に貢献する医師」というおぼろげなイメージではなく、活躍する本学卒業生の個々の姿をもとにしたコンピテンシーを明確に提示することによって、より目的意識の高い入学志願者を確保し、入学のスタートラインから卒業のゴールに向かう跳躍力、さらには生涯学習を続ける強い動機を授けることが可能になるのではないかと考えます。言葉にするには簡単ですが、そのためには自治体や地域医療機関との連携及び意見調整や医療ニーズに関する調査、卒業生のフォローアップ、入学者選抜にかかわる諸案件の調整などが必要不可欠であり、医育統合センターが学内各部門と協働して取り組むべき課題であると考えております。私の臨床医としてのキャリア、地域・世界で活躍する多くの旭川医科大学同窓生と共有できる体験と感情、基礎研究を通じて涵養したりサーチマインドを最大限に活用して精励する所存でございます。

折しも、本学は日本医学教育評価機構（JACME）による医学教育分野別評価を受審中であり、先日、自己点検評価報告書の書面審査、評価員による実地調査が行われました。医学教育の国際基準に基づいて本学の教育の質が審査され、これまでの本学の取り組みで評価される点、改善が必要な点などが明確になりつつあります。本学全体が一丸となって、今後更なる教育の質の向上に取り組む機運が高まっているところでございますが、医育統合センターもその一端を担えますよう、精進いたす所存でございます。皆様のご指導、ご鞭撻ならびにセンター活動へのご理解を賜りますよう心よりお願い申し上げます。就任のご挨拶とさせていただきます。何卒よろしくお願い申し上げます。



教授就任のご挨拶

生化学講座（機能分子科学分野）

教授 川 辺 淳 一

2019年6月20日付けで旭川医科大学生化学講座教授を拝命いたしました。これまで本学の心血管再生先端医療開発講座で約十年間、臨床、研究、教育に携わってまいりましたが、今後は基礎講座の立場から、臨床と基礎との連携、臨床応用にむけた基礎研究、学部学生や若い医師のサイエンス志向の醸成など様々な想いをもちながら再始動してまいりたいと考えております。

米国での10年の研究生活

本学の9期卒業生として、第一内科講座に入局すると同時に大学院に入学し循環器内科医と共に医学研究のキャリアが始まりました。大学院を卒業後、直ちに、米国ニューヨークコロンビア大学へ留学する機会をいただき、現在もなお難治性疾患である心不全の克服を夢見て、心機能ならびに心臓の寿命に関わるカテコラミンシグナル研究を開始しました。本シグナルの効果器である心臓型アデニル酸シクラーゼを初めてクローニングし、これを軸として『心臓カテコラミン系の役割』について遺伝子から、蛋白、細胞、そして遺伝子改変動物レベルまで幅広く研究をしてまいりました。その間、身分も留学生から大学職員として、ボストンハーバード大学（講師）、ペンシルベニア州立大学およびニュージャージー医科歯科大学（准教授）において約十年の研究生活をおくることになりました。

米国での複数の大学で、医学だけでなく生物学、化学、工学などの別分野の世界の精鋭者たちとの仕事を通じて、研究者として広い視野、素養を身につけることができました。30歳ころから、研究費用を獲得しながらラボを運営していく経験は、独法化した日本の大学での活動に大いに役立っています。また、様々な価値観や文化を背景とする人種が集まる米国での生活は、研究者としてだけでなく、人間としても貴重な経験をつむことができました。

母校での「毛細血管」研究の始動

十数年前に母校に戻り、新しい研究をゼロから構築していくことを決断しました。『多細胞生物が維持する上で本質的なシステムとは？』の自問に、たどりついた結論が、新しい研究標的となる「毛細血管」でした。この問いの狙いは、“失われた臓器を蘇らせる”再生医学・医療の「次の一手」に必要とされる概念を打ち出せること、そして、臓器や疾患の枠を越えた多方面の研究展開が期待できることでした。

第一内科講座および同門の諸先生方のご支援で心血管再生先端医療開発講座という活動の場を与えていただき、これまで、毛細血管形成に関わる新規因子や、毛細血管を再生する幹

細胞を発見することができました。これらの知見を幹として、再生医療を含めた多くのプロジェクトが育っています。特に、臓器再生に本質的な「毛細血管」研究を行っていく中で、「再生」と表裏にある「老化」に関する重要な課題解決につながる糸口も見えてきました。現在、着実に外的競争研究費を獲得し、知的財産を創りつつ、虚血性疾患や動脈硬化などに加えて、糖尿病（ラ島の維持再生）、サルコペニア（骨格筋の維持再生）、慢性炎症などの病態解明や治療開発に向けたプロジェクトを展開しています。

本学のサイエンスマインド教育にむけて

これらのプロジェクト遂行の主役は、本学の循環器・腎臓内科、神経内科、さらに心血管外科や放射線科、皮膚科など複数講座の若手医師です。様々な専門分野の研究医が、お互いに意見交換しながら自主的に意欲的に研究を行っております。今後、生化学講座の研究のプロスタッフが加わりプロジェクトにさらに厚みが出てくることを期待しています。

現実の医療も含め、広い視野をもちながら、未知の世界を切り開くサイエンス力は、少子高齢化・AI技術革新の中、混沌とする未来にむけて、医師人生を力強く生きていく原動力となるはずです。研究医や大学院生にとって、研究遂行のすべての経験がサイエンス力を身につける教育そのものです。また、長い臨床医としてのキャリアを持つ基礎医学講座の教官として、若手医師だけでなく教養教育の低学年学生レベルから、医師人生における基礎医学の重要性を説いていきたいと思えます。

本講座の研究プロジェクトで目指すものは、私だけでなく、一緒に研究に参画してくれている仲間みんなの夢です。基礎や臨床講座・疾患の垣根を越えたオール旭川医科大学の連携活動がプロジェクト遂行にとって非常に大切です。今後も引き続き、ご理解ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

旭川医科大学に入学して

医学科第1学年 五十嵐 諒真



旭川医科大学に入学して気が付くと三か月が過ぎ、試験も終わり夏休みとなりました。毎週のレポートや小テスト、部活の新生歓迎や早期体験実習、医大祭などの行事もありあっという間の三か月ではありましたが、充実した日々を過ごしていました。

一年生の学習では、医学を学ぶための根底を築くために生物、化学、物理、心理学など一般教養を学びます。高校までの履修範囲との被りがありますが、概要しか押さえていなかった内容を細かく学ぶことができ、とても有意義な時間を過ごすことができます。高校と大学での勉強方法は違い、困難も見られます。しかし、教授ら先生方の指導もあり同級生みな協力しながら日々勉強、生活しています。

もちろん、医科大学ということもあり、先にも述べた「早期体験実習」のほかにも「医療概論」「地域医療学」と呼ばれる授業も存在します。

体験実習では看護職の立場から病院という現場を見学させていただき、医師でも患者でもない立場を体験できる素晴らしい経験ができました。医療概論では医療哲学についてメタ的思考を用いて話し合うというような授業が行われています。普段当たり前に思ってしまうことを考え直すことで、医療に対してどのように向き合うべきか再認識するきっかけとなりました。地域医療学では北海道の地域医療について学びます。道外出身の私からすると、知らない知識ばかりでとても興味深く、考えさせられる内容です。教養を学ぶ中でもこれらのような講義を受けることでモチベーションを維持し、高齢化社会の中でも機能する医師を目指そうと思います。

また、部活動も盛んで私は弓道部と水泳部に所属しています。弓道部で養える集中力、水泳部で得られる体力を今後の生活に活かしていきたいと思います。

この三か月を通して考えたことを忘れず、医大での6年間を過ごしたいと思います。

旭川医科大学に入学して

医学科第1学年 及川 玲菜



旭川医科大学に入学して早くも3ヶ月が経過しました。雪が降り積もる寒さの中で迎えた入学式が昨日のことにように思い出されます。初めの頃は、高校生活との違いに驚くことも多く、慣れないレポートや、実習に追われる毎日これから大学生として生活していけるのか不安になることもありましたが、しかし、そのような生活にも少しずつ慣れ、今では、旭川医科大学の一員としてやっていけるのだろうか不安になることもなくなりました。また、旭川医科大学は単科大学であるということもあって、今まで以上に人とのつながりの大切さを実感しています。

先輩方に学生生活におけるアドバイスをいただいたり、同期に助けをもらいながら学習を進めていくことが多く、様々な人と関わりを持つことで、学習に関する不安を解消したり、学生生活を充実させたりすることができるのだ

と感じました。

この3ヶ月で特に印象に残っているのは、5月の下旬にあった、早期体験実習です。入学して間もない私たちが、実際の医療の現場を見学させていただくことができるのは、旭川医科大学ならではのだと思います。実際に病院を見学させていただくと、私が今まで思っていた以上に、たくさんの職種の方々の連携によって、地域医療が成り立っていることを知りました。

医師のみならず、看護師や放射線技師、薬剤師、患者さん、そしてその家族、また地域の介護施設などが互いに連携を取ることによって初めて医療を提供できるのです。このような連携をうまく取るためには、いつも相手の立場に立って、相手の話に耳を傾けられる人になることが必要だと感じました。今後の学生生活では、このような人になるためにも、意欲的に学習や、部活動に取り組み、理想の医師像を追求していきたいと思っています。

旭川医科大学での学び

医学科第1学年 神山 琢 弥



四月に入学してから、約三か月が経った。新たな土地に住まい、新たな友と巡り合い、新たな先生に出会った。新しいことばかりのこの三か月間は、あっという間に過ぎた。

埼玉県出身の私は、家族はもちろん親戚もないこの土地で、慣れない一人暮らしをすることになった。はじめは不安だった一人暮らしも、一か月もすれば慣れた。しかし、大学における学習は高校における学習と大きく異なり、三か月経った現在もなかなか慣れない。

高校では問題に対する解答を求めることが重要であり、解答を出すときに必要な原理はとりあえず覚えるように言われることが多い。この内容は大学範囲だから、と。一方、大学では、その大学範囲の内容に取り組むことになる。原理を理解し、説明できるようになることが求め

られるため、評価材料としてはレポートの比重が大きくなる。物事の原理は問題集を解いても分かるようにならない。そのため、予習をしたうえで授業を聞き、復習をして自分の理解を深めていかなければならないのである。

また、大学では医師としての将来に直結する授業も始まる。早期体験実習Ⅰでは、医療・保健・福祉施設などの現場を体験する。医師としてのプロフェッショナリズムを養うことが目標だ。医療概論Ⅰでは、人に医療を施す者になるうえで必要な哲学について学ぶ。「人はなぜ人をケアするのか」や「死とどう向き合うか」など答えのない質問について考え、医療に対する自らの考えを深めていく。

大学における学習は、自らの頭で考えさせられる内容が多い。自分で考えるのは大変であるが、頭を使う学習はやっているととても楽しい。将来より良い医師になるために、大学生のうちに自分で考える力を養っておきたいと思う。

旭川医科大学に入学して

医学科第1学年 川田 栞 寧



旭川医科大学に入学して、4か月が経とうとしています。想像していた以上に忙しい毎日を過ごしてきました。

私がこの4か月の間で特に興味深いと感じた授業は地域医療学です。この授業では北海道の地域医療を担う医師の方がお話をしてください。この授業を受けて分かったことは、実際の地域医療の現場は、思っている以上に人手不足で忙しく、過酷で、複雑だということです。果たして自分は地域医療を担っていいのかという不安もありましたが、将来の自分の姿を具体的に想像できたとともに、これからの医学部での6年間がいかに大事かということを確認できました。

大学では、自主的な学習が求められています。学ぶ内容は高校の時よりも深く、量も多いです。理解したと思っても、それを本当に正しく理解できたと確信を持ってないときや、その事柄につ

いて説明ができなかったときはもう一度原点に立ち返ってじっくり考えるようになりました。レポートなどを書く際は、教科書だけでなく、インターネットの記事や図書館の本から関連する事柄を探して自分で答えを導き出すよう努めています。その過程で、疑問を解くことができたり、他の新たな知識を得ることができたりすると、達成感を覚えます。この4か月で、今までの「勉強」は、「学問」に変わった気がします。

多くの課題やレポート、内容が濃く速い授業など、今はまだそれらに追い付くのに必死ですが、この忙しい毎日は将来医師となったときに時間を有効活用するための訓練で、すべてのことは将来の自分の姿や行動につながっていると思うと身が引き締まります。これからの6年間は、楽しいこと、苦しいことなど、様々なことを経験すると思います。たとえ自分を見失うことがあったとしても、初心を忘れず、仲間と助け合いながら、着実に進んでいきたいです。

旭川医科大学に入学して

医学科第1学年 関根慶佳



医学部進学を志して以来、「なぜ医師になりたいのか」「どのような医師になりたいのか」というありふれた問いの答えにたどり着くために計り知れない時間を費やしてきました。しかしながら、今自分の手元にはその膨大な時間を経て得られた考えよりもはるかに多くの葛藤や思いがあります。入学して僅か数か月の間に経験したことは他の何物にも代え難く、確かに自分の糧になっているという実感があります。教養科目が中心の一年生でありながらこれ程有意義な時間を過ごすことができるのは、地域医療に従事する医療者を育てるという明確な目的の下で教育を展開する旭川医科大学であるが故だと思えますし、そのことは早期体験実習や地域医療学、医療概論などの特色ある科目に顕著に表れていると思います。

また、これらの科目は地域医療従事者の育成の要と成り得るものであると同時に、私の様な

道外の出身者の考えにも強い影響を与えます。日本医療が抱える問題とその変遷、時々刻々と変化する医療現場や倫理観は普遍的な課題であり、将来どこでどのような医療者になろうともその飽くなき答えを求めて自問自答し続ける必要に迫られることは変わりません。このような早い時期からその礎を築く機会を提供して頂けることは、自らの将来の選択肢を大幅に広げることに他ならず、非常に恵まれた環境であると感謝しています。もちろん、単科大学であるが故に学生数が少なく人の交流の輪が限られること、他の分野を志す者がいないことなど、他大学であれば得られたであろう経験が失われていることも事実です。

しかし、それは単科大学故に先生方の専門や学校設備が医学に傾倒しているという魅力と表裏一体であると考えます。積極性を持てば学年の垣根を超えて知識の獲得を図ることが出来る、これほど心躍ることはありません。入学できて良かったと思っています。先生方、先輩方、同期の皆さん、これからもよろしくお願いします。

旭川医科大学に入学して

医学科第1学年 福田瑞樹



この春、一年間の浪人を経て、旭川医科大学に入学し、はやくも3か月がたちました。入学式から、新歓合宿、各部活の新生歓迎会、GW10連休、改元、早期体験実習、医大祭、中間試験など様々なイベントが目白押しで、飛ぶように過ぎる日々だったと思うのと同時に、とても充実した大学生活を送っているように感じられます。

旭川医科大学の講義や実習では、たくさんの発見があります。高校では扱うことのなかった課題や器具、課されることのなかったレポートなどに戸惑うことも多くあります。しかし、友人や先輩方、講師の先生のアドバイスを基に、試行錯誤することで自分の力になっているのを日々感じます。大学での勉強は高校や予備校とは全く異なり、積極的に学ぶ姿勢が求められます。「チュートリアルI」では、与えられた課題をただこなすのではなく、そこから何を学び、どんな関連性や相違点を見出すことができるか

が重要であることを実感します。グループ内のディスカッションでそれぞれの疑問や考えを討論し、学年全体で共有することで、新たな視点や考え方を学ぶことができ、刺激の多い時間です。また、「地域医療学」は、旭川医科大学が力を入れている北海道における地域医療に焦点を当てた講義が行われます。実際に地域医療に従事していた経歴を持つ医師の先生が講義を担当され、テレビなどで取り上げられる地域医療の世間一般の誤った認識と、実際に行われているリアルな地域医療のギャップを指摘し、考えを深めます。私自身が道東出身であり、自分が育った地域の医療が今後どのようになっていくかを考えるなかで、地域医療に貢献したいという気持ちが強くなりました。

これからの大学生活も驚きや戸惑いの連続だと思っています。日々同期と切磋琢磨し、障害をも乗り越えることで、6年間の大学生活をより充実したものにし、目標の医師像に向かって進んでいきたいと思っています。

旭川医科大学に入学して

医学科第2学年 稲葉正昭



この度2019年4月に2年次編入生として旭川医科大学に入学させていただきました。北海道で生活するのは初めてだったため、若干の不安もありましたが、今では熱帯夜のない日々を快適に感じ、旭川での暮らしにすっかりなじみながら、日々の勉強に勤しんでいます。

私は以前、製薬企業に勤め、営業職として医薬品の情報提供・収集の仕事を行っていました。仕事の関係上、医師と接する機会も多く、患者さんのために親身になって診療を行う医師の姿に感銘し、30歳を過ぎて医師を志しました。覚悟して進学したつもりではありましたが、やはり社会人を約10年経た後の2度目の学生生活は想像以上に大変でした。日々の講義はもちろん、予習・復習、レポート課題やテスト、実験実習の日に、充実を感じながらも体力の必要性を痛感しています。特にこの3カ月はチームで取り組む課題が多く、早期体験実習Ⅱはその

良い例です。これは旭川医科大学のカリキュラムのひとつの特徴であると思うのですが、チーム医療の重要性が高まっている今の時代、知識はもちろんのこと、様々な職種のスタッフと円滑に意思疎通を図る能力、そしてその中でリーダーシップを発揮する能力が医師には求められています。早期の段階でこのような地域の医療現場を実際に体験できることは貴重なことであると思いますし、同期の仲間と協力し合いながら取り組めたことは良い経験となりました。

同期の学生たちはまさに文武両道という言葉がふさわしく、皆勉強だけではなく、部活やバイトにも一生懸命取り組んでおり、その姿勢はとてもし一回り年下の学生とは思えず、日々尊敬の念を抱くとともに、自身も負けていけないと奮起させてもらっています。また、編入生は私を含め10名入学しましたが、皆バックグラウンドも様々で、常に刺激をもらっています。恵まれた環境にあることに満足せず、常に好奇心、向上心を持って学業に邁進していく決意です。

旭川医科大学に入学して

医学科第2学年 佐藤有沙



あまりにも緊張していたためにほとんど記憶のない入学式。あれからもうすぐ3ヶ月になるのかと思うと感慨深いものがあります。数々の不安を乗り越え、3ヶ月間走り続けることができたのは、何よりもたくさんの仲間に出会うことができたからだと思います。

入学当初から不安を共有し、励まし合ってきた編入の同期。年齢もバックグラウンドもそれぞれですが、互いに認め合い助け合うことのできる心地よいつながりは、私にとって「ホーム」のような存在です。また、3年生以上の編入の先輩方には、入学前からお世話になり、何から何まで教えていただきました。先輩方に助けていただいたからこそ、今こうして生活できていると痛感します。

同学年のメンバーは、気さくに話しかけてくれる人が多く、仲良くなるのに時間はかかりませんでした。編入という「異色」な存在に壁を作ることなく、講義の合間や休み時間などに声を

かけてくれたり、勉強や遊びに誘ってくれたりすることには感謝の気持ちでいっぱいです。「年齢が違おうと18であることに変わりはないから」と当然のように受け入れてくれた彼らと同期になることができ良かったと心から思います。

こういった仲間と関わることができたのは大学のカリキュラムのおかげでもあります。早期体験実習、医療社会学実習、チュートリアル、生化学実習といったグループで活動する授業が非常に多く、その度に新たなメンバーと出会い、それぞれの活動を通して仲を深めることができました。チーム医療を見据え、協調性・団結力の涵養にこれほどまで力を入れている大学はなかなかないだろうと感じます。

受験勉強という苦しく長いトンネルを抜けると雪国、であり、信頼できる友と切磋琢磨し合える学び舎、でありました。これから先どんなことがあるかはわかりませんが、この場所で5年間、仲間にも恵まれた幸せを噛み締めながら勉学に励んでいきたいと思っています。

旭川医科大学に入学して

看護学科第1学年 笹原温大



旭川医科大学の入学式から3か月ほど経ちました。新歓合宿をはじめ、早期体験実習や医大祭など多くの行事などが流れるようにあっという間に過ぎていったように感じます。

私は推薦入試で旭川医科大学に合格しました。そのため、大学での勉強や周りのレベルについていけるか最初はとても不安でした。しかし、今年は男子が6人と例年より多いということもあり、男子みんな協力して勉強して理解を深めたりしながら日々頑張っています。また、看護学科には話しやすかったり、接しやすかったりする人がとても多いので、すぐに色々な人と打ち解けることができました。看護学科の課題の量はとても多く、毎日のように課題に追われることが当たり前のようになり、逆に課題がない日のほうが不安になってしまうほどになりました。未だに課題の取り組みに対して不慣れな部分もとても多いですが、仲間たちと協力しな

がら頑張っています。そして課題や看護の演習を通して、段々と自分が医療職者になるということを実感していくようになっていきます。ますます忙しくなっていくとは思いますが、頑張っていきたいです。

私はハンドボール部に入部しました。旭川医科大学では部活動がとても盛んであり、大学内の雰囲気盛り上げている要因の一つになっています。はじめは大学で部活をやると思わなかったのですが、その魅力にひかれ入部を決めました。部活では同じ学科の同期、先輩だけでなく、医学科の同期や先輩方など多くの人たちと関わっています。自分をいろいろな面で成長させてくれる場であり、今では入部してよかったなと思っています。また、私はバイトもしておりとても忙しい毎日ではありますが、充実した日々を送っています。

これからますます勉強など大変になったりもすると思います。大学生活を楽しみながらも初心を忘れず、日々精進していきたいです。

旭川医科大学に入学して

看護学科第1学年 田中結衣



旭川医科大学に入学して約4か月が経ちました。一人暮らしや、早期体験実習、医大祭など初めてのことが多かったという間に時間が過ぎていったように感じます。入学して新しい人との出会いや新しい

土地での一人暮らし、将来の夢に直結した講義を受けられることに胸を躍らせていました。本格的に大学生活がスタートすると、年齢・学年問わず、学生と交流することができる場があったり、講義では看護職につくうえで基本となることを学べるだけでなく、心理学や社会論について学べる講義があったり想像以上に充実した生活でした。一方で、大学生活は朝から夕方まで講義を受け、その後部活に励み、帰宅後は課題をこなすという慌ただしいものであるだけでなく、今まで両親が助けてくれていた家事なども自分ですべて行わなければならない、時間の効率的な使い方には苦戦する日々が続きました。

私はこの4か月で多くのことを学びました。早

期体験実習Iでは、病院内での医療従事者の働きを直接目にするので、今まで漠然としていたイメージを明確なものに変えることができました。技術学では、座学で看護技術における知識を学んだあと、実際に演習をすることで、机上の知識だけでとどめず、身体でも学ぶことができました。また、練習を積むたびに自身の成長が感じられ、看護師に少しずつ近づいていけると実感でき、今後の看護の学習へのモチベーションが高まっていくのを感じます。

学習の面以外でも、部活動に入ったことで仲間と練習や行事を通して充実した時間を共有することができ、より楽しい大学生活を送ることができています。

このように、入学してから4か月間は瞬く間に過ぎていきましたが、とても充実した日々となっています。これからは勉強も難しくなり、うまくいかないことがあり、苦悩する日々も多々あると思いますが、将来への希望や理想の看護師像を忘れず、目標に向かって努力し続けていこうと思います。

旭川医科大学に入学して

看護学科第1学年 千葉 木乃実



2019年4月5日、これからの大学生活に少しの不安と、楽しみを胸に入学式を迎えました。入学式を終えた翌日からは新歓合宿があり、学校生活や部活動について先輩方がたくさん教えてくださいました。合宿が終わるとすぐ、部活動の新歓が始まり、バタバタと過ぎた1か月でした。数多くの課題、初めてのテスト、新設科目など、わからないこと、初めてのことも多くあります。そのような日々の中で、多くの体験をし、多くの学びを得ることができていると感じます。求められる主体的な活動や、学習態度、自分のやりたいことだからこそ、力をいれて学ぶことができている。

高校の時のような共用科目は少なく、講義のほとんどが専門的な学習です。そのことで自分の将来像をより明確にすることができます。早期体験

実習では、実際に現場に出たことで、医療者と患者さんのかかわりを見ることができ、現場のスタッフさんが感じる思いを知ることができました。また、実習で知ったことが講義で出てくると、より学びを深められていることを感じます。百聞は一見に如かず、まさにその通りだと感じた実習でした。

慣れない環境の中での多くの学び。大変だと感じることも多くあります。しかしその思いを共有しあったり、一生頑張ったりできる仲間がいることは大きな支えです。また、不安を打ち消してくれる先輩方もいます。多くの人に支えられながら送ることができている大学生活です。ここからの4年間でより多くのことを学び、将来像を膨らませ、自分の納得のいく大学生活が送れたらいいなと思います。これからも周りの仲間と協力し合って自分の追い求める看護師像に少しでも近づけるよう努力していきたいです。

旭川医科大学に入学して

看護学科第1学年 藤澤 怜央



旭川医科大学に入学してから3ヶ月が経ちました。初めての一人暮らし、医大祭、部活動、試験、早期体験実習など慣れないことの連続であったという間に過ぎていく3ヶ月でした。同時に、自分で多くのことを管理し行動していかなければならない事の重要性を感じた3ヶ月でもありました。

大学に入学する前は勉強について行けるか、友達ができるかなど多くの不安を抱えていました。入学してみると講義は多く覚えることがあり、また経験したことの無いレポート提出など想像を上回る忙しさに毎日が過ぎて行きました。提出物の管理や余裕を持って課題を終わらせる計画性などをもっと身につけていかなければいけないと思いました。基礎看護実習Ⅰという講義では血圧の測定やベッドメイキングなどを入学してすぐに学びます。血圧測定の試験の前には多くの人と協力しながら夜遅くまで練習をしました。試験はとても緊張しましたが、仲間と

協力して合格という目標を目指す時間はとても充実したものでした。また、看護師という夢に少しずつ近づいていると実感できてとても楽しい毎日です。

入学時は友達ができるかとても不安でしたが、看護学科での生活や部活動を通して多くの同期や先輩と仲良くなることができました。試験前に自分の担当分野を決めて皆でわからないところを教えあったり、課題を集まって皆で取り組むなど、一人ではがんばれない時も同期と協力することで乗り越える事ができました。先輩は、試験の時に差し入れをもらったり、試験や課題のアドバイスを聞くなど様々な面でサポートしていただきました。旭川医科大学に入学してから同期と先輩のありがたさを感じ、人とのつながりの大切さを感じています。

旭川医科大学に入学し3ヶ月が経ちました。あっという間に3ヶ月が過ぎてしまい4年間がとても短いものなのだと実感しています。限られた時間で大学生活を楽しみ、看護師という目標に向かい意欲を持ち生活していきたいと思えます。

旭川医科大学に入学して

看護学科第1学年 古瀬 もも



旭川医科大学に入学して約4か月が過ぎました。入学式に始まり新歓合宿、早期体験実習、医大祭、部活の大会など様々な行事がありました。毎日が充実していて、一日一日がとても速く過ぎていきます。

大学生活を送っていて、やはり一番大切なのは講義に対して準備をすることと、しっかり講義を受けることだと感じました。大学は高校と違って、講義に対して能動的に動いていかなければいけません。高校のように先生が、一人ひとりを気にかけてくれる訳ではないので自分で課題を管理し、講義を理解できるようにしていくのも自分自身です。毎日たくさんの課題がある中で講義の準備もしていくのはとても大変なことではありますが、講義資料を事前に載せてくれているので資料に一通り目を通すだけでも講義に対する理解度が違うと感じました。たくさんの講義の中でも私は、看護技術を学んでいる時間が一番なりたいものに近づいている気がします。看護技術は講義や演習だけで身につく

ものではなく、授業の時間外でたくさん練習することが必要です。事前学習の中で何ができないかを知っていると、実習や講義後の技術の身に着き方が違います。できなかったことができるようになるとモチベーションも上がり、次の講義に対しても前向きに取り組むことができます。そして、技術を身に付けようとするとき、自分一人で行うよりも友達と行うほうが理解できるし仲も良くなれます。実技や試験の話先輩から聞くことで仲良くなれるし、コツも吸収することができます。同期や先輩と仲良くなれるところが看護学科の良いところだと思います。

大学生活は、毎日が楽しくてあっという間に過ぎていきますが、その中でもはじめをつけて、やらなければいけないことにしっかりと取り組んでいきたいです。4年間という短い学校生活をどのように過ごしていくか考えて悔いの残らないように過ごしていきたいです。

平成31年度入学式を挙りました

平成31年度入学式が4月5日（金）10時30分から本学体育館において行われ、新入生やご家族の方々など、本学関係者を含め約500名が参加しました。

入学式では、今春の学位記授与式と同様に、会場内左右に大型スクリーンが配置され、やや緊張した面持ちの新入生の様子が投影されました。国歌演奏に続いて、新入生一人ひとりの名前が読み上げられ、医学科107名、医学科第2年次編入学10名、看護学科60名の併せて177名が入学を許可されました。

続いて、入学生を代表して医学科 青山 円さんによる宣誓が行われ、新入生それぞれが医療職者を目指す者としての決意を胸に刻み、大学生活の一步を踏み出しました。



▲学長からの歓迎挨拶



▲入学式の様子



▲入学生宣誓

平成31年度 医学部医学科・看護学科 新入生合同研修会が実施されました

平成31年度医学科・看護学科新入生合同研修会が4月8日（月）、9日（火）の二日間にわたり実施されました。

一日目は、まず看護学科棟大講義室に集合し、教育担当副学長の吉田成孝教授からご挨拶があり、オリエンテーションが行われました。その後、「旭川医科大学が重視する地域医療について」と題した全体ガイダンスが地域医療教育学講座 野津司准教授(当時)により行われ、先生ご自身の体験談を交えながらの北海道の地域医療に関するお話に、新入生たちは熱心に耳を傾けていました。

その後、医学科、看護学科に分かれたガイダンスがあり、医学科では、学年担当の秋田谷龍男教授、教育センター副センター長の蒔田芳男教授からカリキュラム等の説明がありました。

そして、看護学科では、学年担当の長谷川博亮教授、看護学講座の服部ユカリ教授、藤井智子教授、伊藤幸子教授、一條明美准教授から、看護学科での『学び方』や保健師課程や助産師課程のカリキュラム等についてガイダンスが行われました。

午後からはグループ毎に分かれて、救急医学講座 藤田智教授と名寄市立病院 山巻多先生のご指導のもと、心臓マッサージなどの救急蘇生実習を行いました。各グループには、本学卒業生を含む研修医の先生方にも

ついていただき、1人ずつ心肺蘇生キット「あっぱくん」を使用しながら、心肺蘇生の知識・技術を学びました。

一方、北海道労働局の講師による「知って役立つ労働法（アルバイトを始める前に）」では、ブラックアルバイトから身を守る方法についてご講演いただきました。

二日目は、「これだけは知っておきたい！マナーの基本」と題して、リフレイム代表の河野恵美講師による講演が行われ、大学生として身に付けるべきマナーについて学びました。引き続き、メンタルヘルス担当学長補佐の千葉茂教授から、「睡眠とメンタルヘルス」と題した講演が行われ、睡眠の重要性についてお話いただきました。講演後も、新入生から積極的な質問が交わされ、学生達の関心の高さが感じられました。

午後からは、授業・学習に関することや学生生活について事務局から説明がありました。

最後に、保健管理センターの藤尾美登世保健師からは、「健康な学生生活を送るには一ほけかんとどう付き合うか」と題し、保健管理センターの利用方法等についてお話がありました。

二日間ではありましたが、内容の濃い有意義な研修会となりました。



▲
オリエンテーション



▲熱心に聴く受講生



▲救急蘇生実習

健康セミナー「わたしのみんなのげんき種 in 緑が丘」を開催

5月13日(月)、緑が丘テラスにて、看護学科4年生12名、旭川市内の緑が丘地区の60～70代の住民24名が参加し、健康セミナー「わたしのみんなのげんき種 in 緑が丘」を開催しました。

このセミナーは、地域包括ケアの視点に立った看護ができる学生を育てる教育の一環として実施したのですが、同時に住民の皆さんが自分の健康を振り返る機会にさせていただくという目的もありました。

看護学科の学生1名と参加住民2名がグループとなり、血圧測定や握力、嗅覚テストなどの健康チェックを実施した後、自分や周りの人の普段の元気の源泉を一緒に考える体験型のワークショップを行い、学生は地域住民の健康に対する意識を知り、介護予防の重要性を学びました。参加住民からは「健康に関して注意すべき点がわかった。」「これからも社会交流の場を設けてほしい。」などの意見をいただきました。また、学生からは「教科書で学ぶよりも高齢の方はとても元気だった。患者に本当に必要なケアは何かを考えていきたい。」「元気うちから介護予防を始めることによって健康寿命の延伸につながっている。」などの気づきがありました。

地域包括ケアは、人々が介護を必要とする状態になっても、住み慣れた地域で自分らしい人生を最期まで続けていけるように新たな地域社会の構築を目指すものです。看護学科ではこれからも時代に必要とされている、地域を見据えた看護師・保健師・助産師の育成に取り組み、地域住民との繋がりを大切にした実践的な教育の充実を図って参ります。

この度、ご協力いただきました地域住民の皆様にご心より感謝申し上げます。



医大祭2019「医進月歩」を終えて

医大祭実行委員会 委員長 滝 沢 元

6月に行われました、旭川医科大学医大祭にて実行委員長を務めました滝沢元と申します。第45回旭川医科大学医大祭「医進月歩」が無事に終了いたしましたことを報告させていただきます。医大祭を運営するにあたりまして協力して下さった関係者の皆様にこの場を借りてお礼申し上げます。

今年度のテーマ「医進月歩」は、四字熟語「日進月歩」にかけまして、我々学生一人一人が日々目まぐるしく進化する医療を絶えず学び続けていかなければならないという意志とともに、何事にもひたむきに取り組む姿勢で学生一同素晴らしい医大祭を目指し、成功させよう、という意志を込めてこのテーマを設定しました。

目玉の催し物の一つである講演会では、演劇ユニットTEAM NACS リーダーの森崎博之さんを講師としてお招きいたしました。北海道を中心に俳優、脚本家、演出家として幅広く活躍されており、「生きることは食べること 森崎博之の熱血あぐり魂」という書籍も出版され、今回は「生きることは食べること」というテーマでご講演いただきました。また、翌日には、「摂食・嚥下障害」をテーマとした講義を本学の看護学科の山根由起子教授に行っていただきました。同日午前には体育館にてお笑いライブが開催されました。今年は「安田大サーカス」「フルーツポンチ」「アイデンティティ」「ゴールデンルーズ」の総勢4組の芸人さんをお呼びすることが出来ました。例年通り大盛況となり、多くのお客様にお楽しみいただけました。

また、旭山動物園、旭川水道局とのコラボ企画もございました医学展や、市民の皆様に参加していただくフリーマーケット、青空市、ゲーム大会自動車の屋外展示等、各部活が中心の模擬店など数多くの催し物がございましたが、準備した企画全てにおいて大きなトラブルもなく、全学生、医学科看護科両同窓会、学生支援課を始めとした教職員の方々、そして地域の皆様のご協力があったことです。誠にありがとうございました。来年度も変わらぬご支援のほどよろしく申し上げます。





地域枠学生とメンター教員との交流会を開催

今年度より、医学科地域枠入試で入学した学生を対象に、地域枠学生のキャリア支援メンター制度が導入されました。学年の異なる学生でグループを作ることで、サークル以外の交流や、進路や就職の悩みをメンター教員や上級生に相談できる環境を作ることを目的としています。

今年度は1～3年生の各学年2～3名ずつで1グループを構成し、各グループを担当するメンター教員との顔合わせも兼ね、令和元年6月14日(金)に地域枠学生とメンター教員との交流会を開催いたしました。

当日は、学生のキャリアプラン支援委員会委員長の吉田副学長からメンター制度の概要説明と、メンター教員・キャリアプラン支援委員会委員の紹介があり、その後グループ毎にわかれて顔合わせが行われました。グループの顔合わせでは自己紹介や将来のキャリアプランについての意見交換等、なごやかな雰囲気での交流が行われました。今後も個別面談等で地域枠学生のキャリア支援を行っていく予定となります。進路について不明な点がある場合には、メンター教員、卒後臨床研修センターや学生支援課にお気軽にお問合せください。



難病の方々から体験談を聴く — 旭川医科大学医学部看護学科3年60名 保健医療福祉システム論 —

令和元年 7.4(木)旭川医大図書館ディスカッションスペースにおいて、難病連旭川支部の患者・家族 10 名から体験談を聴く授業を行いました。学生は 6 グループに分かれ、1-2 名の患者・家族の方がグループに入り交流しました。学生が印象に残ったお話や感想を紹介します。難病連の皆様、学生の授業に快くご協力いただきありがとうございました。

<1グループ> 脊髄小脳変性症・多系統萎縮症

- ・病を抱え前向きに生きることは難しいと考えていたが、家族の支えや楽しみを見つけ治療や社会資源を活用し病氣と向き合って生きる姿を見せてもらった。
- ・難病連で仲間に出逢えて似た境遇の人達と励まし支えあう患者会の存在の大きさに驚いた。
- ・どんなに看護技術が上手でもコミュニケーションと笑顔に癒されて元気が出ると聞き、笑顔を大切に接していきたいと感じた。

<2グループ> 脊髄小脳変性症

- ・残された力、今できることを全力で取り組む、進行を少しでも遅らせるため体を動かし工夫するなどとも前向きなことが印象的だった。
- ・病院では無理させないことで症状が進行し、寝たきりになってしまう方がいるため、その人の状態をきちんと把握することが大切と学んだ。
- ・看護師だけでなく、理学療法士やケアマネージャーとの関わりが多いと聞き、多職種との連携が大切だと思った。

<3G> 多発性硬化症

- ・1 人 1 人症状が異なり、合う治療も個人差が大きいと聞き、難病をひとくりにするのではなく、その人の話を聞いて寄り添わなければ個性を大切にしたい良い援助ができないことがわかった。
- ・治らない、原因がわからないという不安・恐怖・絶望のようなものを感じたこともあるが、患者会での同じ病氣の方との関わりは明るく語られ、周囲の存在が共に闘う前向きな気持ちにつながっていると感じた。

<4G> パーキンソン病

- ・人それぞれ症状や進行度が異なるため、その人を見て、一歩踏み込んで患者側に立ち笑顔で接してほしいという言葉が印象に残った。
- ・パーキンソン病はうつ病になりやすい特徴から、予防のためボランティア参加などの日常生活の工夫を学んだ。
- ・現状維持のため友の会で情報共有し病氣から目をそらさず希望を持ち生活すると、公表せず苦しんでいる人もいるとわかり、患者会等の情報提供をしたいと思った。

<5G> ベーチェット病、全身性エリテマトーデス

- ・入院生活でひどく辛い状態にある患者さんに医療者の配慮のない言葉や行動で傷つけるだけでなく治療意欲も下げってしまうことがわかった。前向きになれるかどうかには看護師の関わりもとても大きいと感じた。
- ・看護師になったら、困った時は難病連の方々に相談することができること知り、頼らせていただこうと思った。

<6G> 全身性エリテマトーデス

- ・診断までに時間がかかる大変さ、診断後の大変さなど多くのことを乗り越えた上で前向きに過ごすことができていることを学んだ。
- ・「病氣にかかってラッキー。人の痛みがわかるようになり、病氣にならなかつたら出会えない人達にも出会えた」という言葉に感銘を受けた。



家族による工夫をこらした介護用品コーナー

<今村支部長より学生へのメッセージ>

体験談の授業は今年 3 年目。内容が濃くなってきたと感じる。前支部長が本日本体調により欠席となってしまったが、このような活動を創り上げてきてくれた人。難病連は 34 万人都市ではまだまだマイナーな存在。看護学校をまわり、難病を知っていただきたいと思っている。身体が弱くても役員として受け入れてくれる良い組織です。学生の皆さん、医の道を極めてください。



教員の異動

令和元年5月16日	昇任	教育センター	教授	野津司
令和元年5月16日	昇任	医育統合センター	教授	牧野雄一
令和元年6月20日	昇任	医学部産婦人科学講座	准教授	片山英人
令和元年6月20日	昇任	医学部生化学講座 (機能分子科学分野)	教授	川辺淳一
令和元年6月30日	辞職	教育研究推進センター	准教授	竹内文也
令和元年6月31日	辞職	病院第一内科	講師	片山隆行
令和元年7月1日	昇任	病院第一内科	講師	澤田潤
令和元年7月1日	昇任	病院病理部	講師	湯澤明夏
令和元年7月1日	採用	インスティテューショナル・リサーチ室	講師	大関智史
令和元年7月11日	昇任	医学部看護学講座	講師	石川千恵
令和元年8月1日	採用	教育研究推進センター	講師	笹島仁

今後のスケジュール

9月9日(月)～18日(水)	看護学科第3学年前期試験週
9月9日(月)～20日(金)	医学科第3学年前期試験週
9月16日(月)～27日(金)	医学科第1、2学年前期試験週
9月16日(月)～27日(金)	看護学科第1、2学年前期試験週
9月18日(水)	解剖体慰霊式
9月19日(木)～9月27日(金)	医学科第4学年試験週
10月7日(月)～8日(火)	B型肝炎ワクチン効果測定等採血日 (医学科第4学年対象)
11月21日(木)	B型肝炎ワクチン第3回接種日 (看護学科第2学年対象)
11月5日(月)	本学記念日
令和2年1月8日(水)～9日(木)	B型肝炎ワクチン第3回接種日 (医学科第3学年対象)
令和2年1月21日(火)	B型肝炎ワクチン効果測定等採血日 (看護学科第2学年対象)

冬季休業

医学科第1学年、看護学科第1学年	12月16日(月)～1月14日(火)
医学科第2学年、看護学科第2学年	12月16日(月)～1月14日(火)
医学科第3学年	12月16日(月)～1月3日(金)
看護学科第3学年	12月9日(月)～1月3日(金)
医学科第4学年	12月30日(月)～1月10日(金)
看護学科第4学年	12月9日(月)～1月3日(金)
医学科第5学年	12月9日(月)～1月3日(金)
	12月23日(月)～1月17日(金)

訃報



本学生理学講座(神経機能分野)教授柏柳誠氏(享年64才)には,令和元年7月17日(水)逝去されました。

ここに謹んで哀悼の意を表します。

同氏は,平成15年12月本学生理学第二講座第三代教授に就任され,特に嗅覚系で見られるダイナミックな神経回路の構築機能と脳内の情報処理に力点を置いた研究を進め,感覚生理学の発展に大きく貢献されました。

平成24年にはオオカミの尿に含まれるピラジンと呼ばれる化学物質がシカやげっ歯類等の被捕食動物に忌避行動や恐怖情動を引き起こすことを発見し,その作用が嗅覚系を介した神経回路によって生じることを明らかにされるなど,その優れた功績が高く評価され,平成25年度日本味と匂学会論文賞を受賞されました。

また同氏は,日本味と匂学会長や日本生理学会理事を務められるなど,多くの学会で指導的立場として活躍され,北海道地区においても北海道味覚嗅覚研究会を主宰されるなど,地域の学問・研究水準向上のために尽力されました。

さらに,本学学生の教育・研究指導にも情熱を注がれ,本学の発展に寄与されたご功績は誠に顕著でありました。心よりご冥福をお祈りいたします。

(総務課)

